PL1

薬学の原点と将来

Prospects of Pharmaceutical Sciences in Japan

内海英雄
九州大学大学院薬学研究院
Hideo Utsumi, Faculty of Pharmaceutical Sciences, Kyushu University

グローバル化、規制緩和、構造改革などにより、この数年で社会は大きく変化し、薬学を取り巻く状況もこの変化に様々な影響を受けている。製薬産業においては、「規制緩和」と「グローバル化」により、新たな生存戦略が必要となってきた。大学は、「構造改革」のもと、教育・研究環境の改革と評価を求められ、教員は産学連携の推進や、科研費などの外部研究資金の獲得に翻弄されている。薬学教育においても、昨年度に薬剤師資格の「グローバル化」により６年制が導入され、臨床薬学がより重視され、実務実習への対応が急務となっている。一方で、「規制緩和」の名のもとに、薬系大学の新設が相次ぎ、2000 年以前の 46 校から 2007 年に 72 校となり、更に新設が予定され、13000 人もの薬系大学卒業生が見込まれている。これらは我々の想定を超えており、薬学会においてもこれから起こる状況を予測し適切な対応をとることが強く求められている。

このような変革期を迎え、薬学の将来を考える上で薬学の原点を改めて直視することが必須に思える。日本の薬学研究は長井長義先生の教導を受け、天然物有機化学を源とし、有機化学、生化学へと「化学」を中心に発展してきた。今日では、薬学は人の健康に向け、「薬を創り、安全に供給し、適正に使用する」ための総合科学であり、それに向けた人材育成が薬学教育であることに異論はないであろう。このことが薬学の原点であれば、薬学の研究・教育も「医薬品の創製・生産・管理から適正使用」までを包含し、社会貢献することが求められている。薬系大学入学生の 9 割近くが 6 年制で、そのほとんどが薬剤師を志望し、社会からも「信頼される薬剤師」を期待されている。従って、薬系大学の多くはこれまで以上に薬剤師を育成する責務を負うこととなり、臨床現場に近い領域の薬学研究も求められるであろう。

一方、政府は、総合科学技術戦略として、医薬を重要課題の筆頭に挙げ２０２５年までを視野に入れた長期戦略指針「イノベーション２５」を取りまとめつつある。これらを勘案すると、薬系大学の研究環境は我々の努力次第で大きく発展することが期待される。しかし、創薬研究に関して、医学を始め、工学、化学、農学など他の学問領域からの取り組みには目を見張るものがあり、日本化学会も医農薬化学ディビジョンを設け、重要課題の一つとしている。加えて、融合領域として医工あるいは医農連携が積極的に推進されようとしている。歴史ある日本の薬学研究が社会の要請に応え、一層発展するか否かは、当に我々薬学会の重要な課題であり、6 年制学生が卒業する 5 年後に向け、薬学会の果たすべき役割は大きい。日本薬学会には 7 つの基幹部会と４つの醸成部会が設けられている。部会活動の一層の推進と活用を通じて、創薬・臨床・基礎薬学の全てにおいて、薬学研究の推進・人材育成、それを支える学会のグローバル化・年会の活性化に向け、日本薬学会全体の強化を図るべきであろう。